

郷土資料館だより

3月15日号：通算第38号

発行：平成14年3月15日
中川町教育委員会自然誌博物館開設準備室
電話8-5133 ファクス8-5134
URL <http://city.hokkai.or.jp/kubinaga>
E-mail kubinaga@hokkai.or.jp

The Newsletter of the NAKAGAWA MUSEUM

No.38

母校の再生に感激-エコミュージアム説明会-

さる3月2日の土曜日、エコミュージアムセンターでエコミュージアム説明会が開催されました。土曜日の夜にもかかわらず、佐久地区を中心に35名の方々に参加していただきました。

今回の説明会は、2月に開催されたマチおこしセミナーと同様に、エコミュージアムの考え方をより深く知っていただくとともに、センターのお披露目の意味も込めて、施設内を見学していただきました。説明会の中では、日本のエコミュージアム発祥の地

「山形県朝日町のエコミュージアム」のビデオを見ていただきました。エコミュージアムの考え方とともに、朝日町の地域特性を生かしたマチづくりと人々のかかわりについて学んでいただけたのではないかと思います。その後の質疑応答では、展示室の観覧

料や宿泊料金、冬季間の営業、スタッフ体制などの管理運営に関すること、看板の設置や通学路を通ることになる自動車の問題など、今後の協議の参考となるご意見をたくさんいただきました。その後の施設見学では、地域のシンボルであった母校を懐かしむとともに、きれいに生まれ変わったセンターに皆さん期待を大きくふくらませていました。

4ヶ月後に迫ったオープンに向けて、エコミュージアムセンターを核としたマチづくりにまい進していかなければと、気持ちを新たにスタッフ一同なのでした。

お知らせ

センターの見学を開放していましたが、本格的な展示準備に入るため、平常時の見学をご遠慮させていただきたいと思います。7月1日のオープンをどうぞお楽しみに。



森と人々の暮らしを学ぶ-森の学校2002冬-

さる3月5日から8日の3泊4日の日程で「森の学校2002冬」現地スクーリングが「人と自然環境 - 環境に適応した森、その森に生きる人々の自然観を考える -」をキーワードに、6名のリピーターを含む19名の受講生を迎えて開催されました。これまで同様、北海道大学中川研究林、北海道立林業試験場道北支場、地域講師の皆さんにご協力いただいて、フィールドワークと室内実習を織り交ぜながら、日程は進んでいきました。

フィールドワークの1日目は、北大研究林を山スキーやスノーシューで歩きながら、除伐体験、氷紋の観察、動物の足跡などの観察を中心に行いました。宿舎では、伐採した樹を使って年輪から木の成長を読み取る実習を行い、岡田穰一さんに昔の林業のお話をいただきました。2日目は、歌内の研究林を歩き、北方の森林の見学や矢島弘章さんによるアイヌの遺跡の解説を聞きながら、森と人々のかかわりを学びました。宿舎に帰ってからは、枝の成長について実習を行いました。そのほか、「森と人との共生」についてのセミナーや記念品づくりなどを通して学び、そして楽しんでいました。

現地スクーリング後のアンケートを見ると、「住民の皆さんとの触れ合いの機会がもっとあれば」「実際に森の側に住んでいる方々と話しあってみよう」という意見が多くありました。町外の方々に中川を学んでいただく一方で、住民の皆さんに中川を見つめ直してもらえるような、新たな交流と地域の魅力の新発見・再発見の場となる森の学校にしていかなければならないと思っています。



連載企画「なかがわエコミュージアム構想」最終回

全5回を目標に始まったこの連載もいつの間にか今回で15回目を迎えました。エコミュージアムの考え方の概要や、先進地の視察の様子、エコミュージアムセンターの改修工事の様子などをお伝えしてきましたが、来年度にはいよいよエコミュージアムセンターのオープンをひかえ、気分も新たに取組んでいかなければならないように、エコミュージアムの考え方を取り入れたまちづくりについても、構想よりも実践が求められる時期にきたのではないかと思います。そこで、今回をこの連載の最終回として、「エコミュージアムの考え方」「中川でのエコミュージアム」という原点に立ち戻って解説したいと思います。

「エコミュージアム」という言葉は「地域まるごと博物館」「生活・環境博物館」と訳されるように、建物としての博物館と比べられることが多くあります。連載第1回で

	<場>	+ <内容・対象>	+ <人>
従来の博物館	<建物>	<収集品>	<専門家+公衆>
エコミュージアム	<領域>	<遺産・記憶>	<住民>

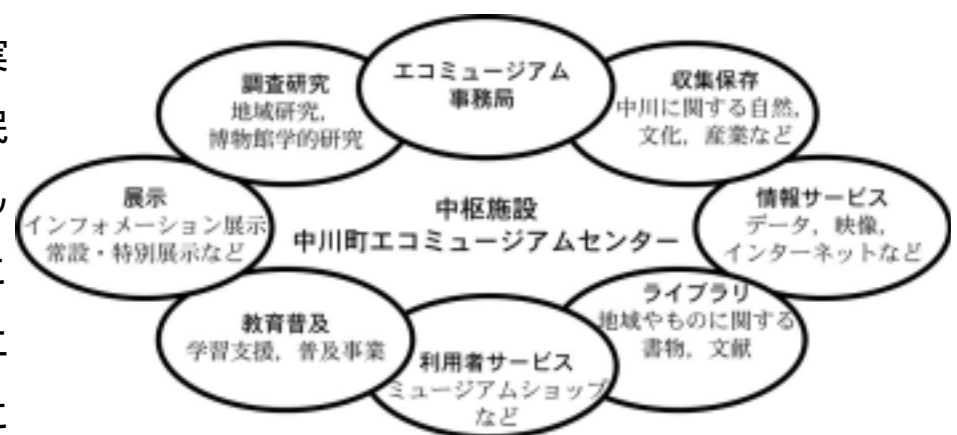
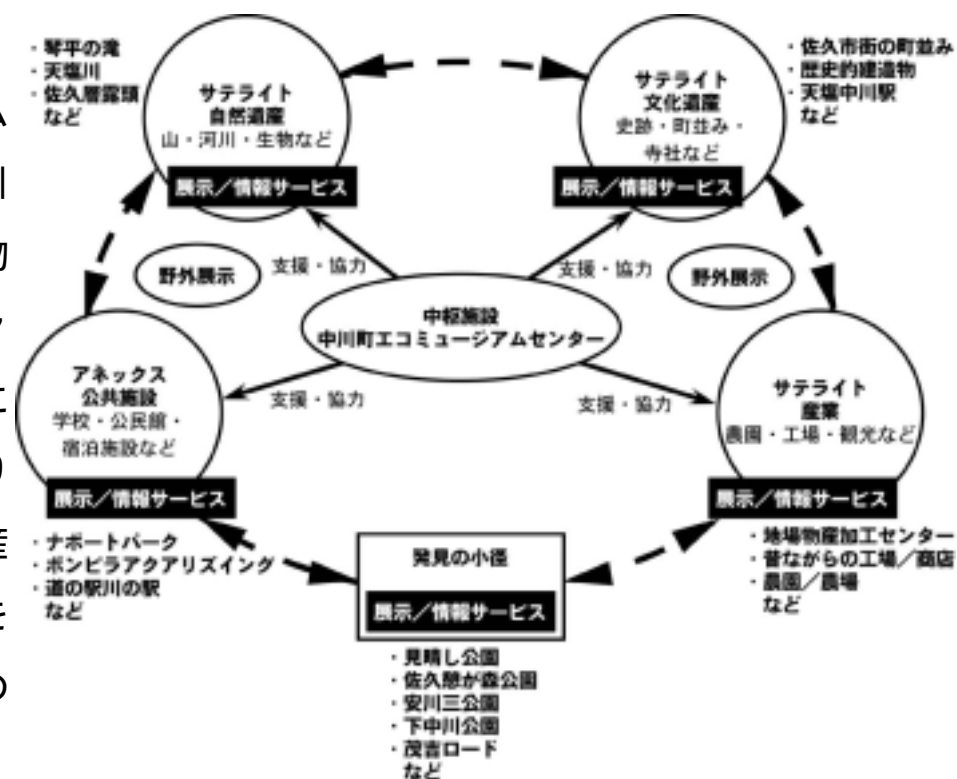
という博物館活動の3つの要素について解説しました。従来の博物館においても、その在り方が見直されてきており、展示や調査研究はもちろん、学芸員や来館者など、そこに集う人々の関わり合いや、事業展開にも重点を置くようになってきています。エコミュージアムについても同様です。地域の発展に寄与するというエコミュージアムの考え方のひとつには、単純な経済的発展だけでなく、「ここにずっと住み続けたい」「生きがいをもってよりよく暮らしていきたい」という、一人ひとりの生活に密着した目的があります。そこには、自分自身の生活を見つめ直し、地域の新発見・再発見をするなかで、地域に対する愛着や誇りを持つことも含まれると思います。このように書くと難しいことのように思えますが「(自分自身を含めた)おらがまちはこのすばらしいところがあるんだ」と言えるような、そんなまちづくりの第1歩を踏み出すためのエコミュージアムということができると思います。

これまでも森の学校や郷土資料館の事業を通して、町内外の様々な人とかかわりを持ちながら展開しています。森の学校では、町外の方々に中川で学び体験してもらう場を設け、ポンピラ塾や林業グループの皆さんなどに地域講師としてご協力い

ただくことで、「住民一人ひとりが学芸員」というエコミュージアムのキーワードを気負うことなく実践していただいています。また、普及事業では、ポンピラ塾の皆さんをはじめとするお年寄りの皆さんに昔の食事や林業の様子を再現していただいたりするなかで、生活の知恵やまちの歴史を次代に伝える役目を担ってもらっています。

さて、エコミュージアムセンターを中心とする中川エコミュージアムは、建物の整備とともに町内の様々な財産や文化をそれぞれに結びつけていく必要があります。様々な点在する遺産や文化を背景とした活動を通して、自分たちの地域の魅力を伝えていきませんか。

それとともに、エコミュージアムセンターの役割を実践していくためには、住民の皆さんをはじめたくさんの人々に利用してもらうことが第1歩になります。エコミュージアムセンターに命を吹き込むのは、人々のかかわりなのではないでしょうか。



中川町エコミュージアムセンターのオープンにともなう、愛称などの募集にたくさんのご応募をいただきましてありがとうございました。愛称部門には2000点あまり、マスコットキャラクター・ロゴマーク部門には約100点の作品が寄せられました。入選作品が決まりましたら郷土資料館だよりでもお伝えしますので、楽しみに。

